保育構想案

奈良教育大学附属幼稚園 保育教諭

3歳ぶどう（男児7名女児6名 計13名）
担任 白石 真季

1．活動名
「アサガオを育てよう」

2.子どもの姿と読み取り

・登園後、ほとんどの子が朝の支度を自分で済ませることができるようになってきた。その後、好きな遊びに自ら向かったり、友達や保育者のしている遊びに興味を持ち一緒に遊び始めたりする姿が見られる。登園後の朝の支度の流れの見通しを持ち、安定して遊び始められるようになっている。

・自分で選んでする遊びでは、「森に、ダンゴムシさがしにいく。」「ストライダーに乗りたいからさがしてくる。」など、保育者が近くにいなくてもしたいことを言葉にして遊び始める子が増えてきた。保育者のそばにいることで安心して遊ぶ子も、保育者が移動する場所についてくるが、移動したその場でみつけた遊びをしている。 色々な場所で、その瞬間に出会う環境（モノ・コト・ヒト）と関わることでしたい遊びをみつけて遊ぶ様子も伺える。

・遊びの中で「ストライダーに乗って友達と走りたい。」と友達と園内をストライダーで走り回ったり、「たくさんの水を波板に流したい。」と大きいボウルで繰り返し水を流したり、「ソフトブロックで秘密基地を作りたい。」と言って組み立てたりする姿が見られるようになってきている。自分なりに思いを持って遊びをより楽しもうとする子もいるようだ。

・保育者と友達の会話から友達が困っていたり、声を出して泣いていたりしていることがわかると、そばに行きアドバイスをしたり、手助けしたり、「どうしたの？」と声をかける姿が見られるようになった。友達に対して思いやりの気持ちを持っている様子が伺える。

・園の生活の中で友達との会話のやりとりが増えてきている。「一緒に遊ぼう」「〇〇ちゃん、森に遊びに行こうよ」など友達を誘って遊んだり、「手をつないで座ろう」と一緒に手をつなぎながら座っておしゃべりを楽しんだりする姿が見られるようになってきた。友達と一緒に過ごす心地よさを感じている中で、もっと友達と関わりたいという気持ちや自分の思いを友達に伝えて遊ぶ楽しさを感じているようだ。一方で、友達の使っているものを自分もしたいと思ってとったりしたり、友達も喜んでいると思ってふざけすぎたりするなどのトラブルが起こることもあり、友達と一緒に遊びたいからこその衝突が少しずつ増えてきている。

・「おーばーけーだぞー」とおばけになりきって友達と追いかけあったり、「この子が病気になったから、病院に連れて行くの。」と友達と人形を病院と決めたところに連れて行ったり、治療をしたりとそれぞれの病院のイメージではあるが、友達と一緒に遊ぶ姿が見られる。友達と同じ簡単なイメージを持って遊ぶことができる。

・みんなでする活動では、友達と歌を歌ったり、一緒に動いたりする中で、顔を合わせて笑いあったり、友達の様子を面白がったりする姿が見られてきた。ぶどうぐみとして友達と一緒に過ごす園生活の楽しさを感じ始めている。

・排泄に関しては、オムツに出すことはないが不安から、はいてくる子や、間に合わず服を汚して着替える子もいるが、全員がトイレで排泄することができるようになった。衣服の着脱などは、自分でやろうとする子や保育者に手伝ってもらいながらする子など個人差が見られるが、保育者とどうしたいかを話し合い、その中で自分がどうしたいのかを自分なりに保育者に伝え、行動しようとする姿が増えてきた。また、身の回りの自分でできそうなこと

を「自分でやってみる。」と自らやろうとする子もでてきている。

・4～5 月に園内のカラスノエンドウを集めることを楽しんでいた。それ以降も、自分で見つけた草花を持ってきて保育者に見せたり、ダンゴムシを捕まえたり、子どもの森に落ちている実やドングリを拾って集めたりすることを楽しむ姿も見られた。集めることを楽しんでいるため、満足するとそのあとに何かに使ったりすることはないようで、次の日もまた最初から集めだす子がほとんどである。自分なりに遊びの中などで草花や生き物と触れ合いながら遊びを見つけ、楽しんでいるようだ。

・6月末から栽培活動として生長の様子がわかりやすいアサガオを選んだ。種の入ったパッケージを見て「ピンクの花がいい」「水色の花がいい」など自分が咲いてほしい色を口にしていた。栽培を始め、芽が出始めてから少しずつ興味が増したようで、水をあげたり、伸びた蔓をネットに絡ませたり、生長の様子を保育者に伝えたりするようになった。あさがおのいろいろな部分で興味を持って関わったり、見守ったりしているようだ。

3. ぶどうぐみの目指す子どもの姿

〇自分なりに思いをもって、意欲的に試したり、繰り返したりしようとする子ども
〇友達と過ごす中で、自分の思いを伝えたり、聞いたりしながら、一緒に活動したり、遊んだりすることを楽しむ子ども
〇身近な出来事に、自分なりに関わろうとする子ども

4.活動のねらい

〇アサガオに興味・関心・愛着を持つ。
〇アサガオに関わる中で、自分なりに気付いたことを話したり、思いついたことをしたりしようとする。

5.評価規準

知識及び技能の基礎	思考力・判断力・表現力等の基礎	学びに向かう力・人間性等
〇アサガオついて興味をもつ。 〇アサガオの生長を知る。 〇アサガオを育てるために必要なもの（土・水・太陽の光）を知る。 〇アサガオの周りの環境にも関わったり、興味を持ったりする。	〇アサガオの生長を見て気づいたことや驚いたことなどを言う。 〇アサガオの様子を見て自分ができることやしたいことを保育者や友達に言う。	〇アサガオについて関心を持ち、意欲的に観察しようとする。 〇アサガオに自分なりの思いをもって関わろうとする。 〇アサガオの生長のために自分なりにお世話をする。

6.環境構成

〇活動内容の設定理由

園生活にも慣れてきて、安定して遊び始めるようになり、友達や保育者を意識しながら身近な植物（カラスノエンドウ）や生き物（ダンゴムシ、一緒に進級してきたカブトムシの幼虫）に興味を持ったりして、少しずつ周りの環境に関わろうとする姿が見られるようになってきた。この姿から、クラスとして子どもたちが共通して意識できる環境として生長の変化の様子がわかりやすいアサガオを育てることにした。ぶどうぐみのアサガオが育っていく過程で自分なりに愛着をもったり、意欲的に関わったりしてほしい。

〇教材について

「アサガオ」

・一連の生長が短期間で観察できる。

　→3歳児がパッと見ただけでも変化に気付きやすいことで、生長を期待しやすい。

・次々と、花が咲く。

→今回、プランターは個人のものとはせずクラスものとしているので、子どもたちは花があればあるほどとると予測される。誰かが摘み取ってしまった後でも、また花が咲くことでまた別の日にも花の様子を見ることができる。

・アサガオ自体に様々な種類がある。

　（今回は、大輪のもの・小さい花が咲くもの・長く花が咲くもの・様々な色の花が咲くものを選んでいる）

・遊びに使える（色水遊びなど）

・丈夫で枯れにくく、育てやすい。

　→水をあげすぎたり、花や葉をたくさんちぎったりとどのように扱ってもすぐに枯れたりすることはあまりない

〇展開の工夫

・アサガオを身近に感じられるように保育室前にプランターを置いて置く。

・子どもたちがあさがおの生長や変化に気付けるように、ネットは子どもたちが届く高さまでにしておく。

・子どもたちが好きな時に、水やりなどができるようにプランターの近くに水のたまったバケツやタライを置いて置く。

7.ESD との関連

〇活動を通して養いたい ESD の視点

多様性：アサガオの中でもいろいろな種類があることを知る。

　　いろいろな感じ方を持つ友だちが周りにいることを知る。

相互性：アサガオとともに暮らしていることを意識する。

有限性：アサガオもいつかかれてしまうことを知る。

連携性：友達のアサガオの関わりに興味をもって自分も関わろうとする。

責任性：自分なりにクラスのアサガオに関わり生長を見守ったり、お世話したりする。

〇活動を通して育てたい ESD の資質能力

多面的・総合的に考える力

・アサガオを使った遊びを考える。

・アサガオの思いは友達によってさまざまであることを知る。

コミュニケーションを行う力

・アサガオについて知っていることをそれぞれの経験をもとに話したり、友達の話を聞き、思いや考えに触れたりする。

他者と協力する力

・クラスの友達のアサガオへの思いを知り、同じ思いの友達とお世話をしようとする。

進んで参加する態度

・アサガオ以外の植物や生き物に関心を持つ。

・アサガオに対して意欲的に自分なりの思いを持って関わろうとする

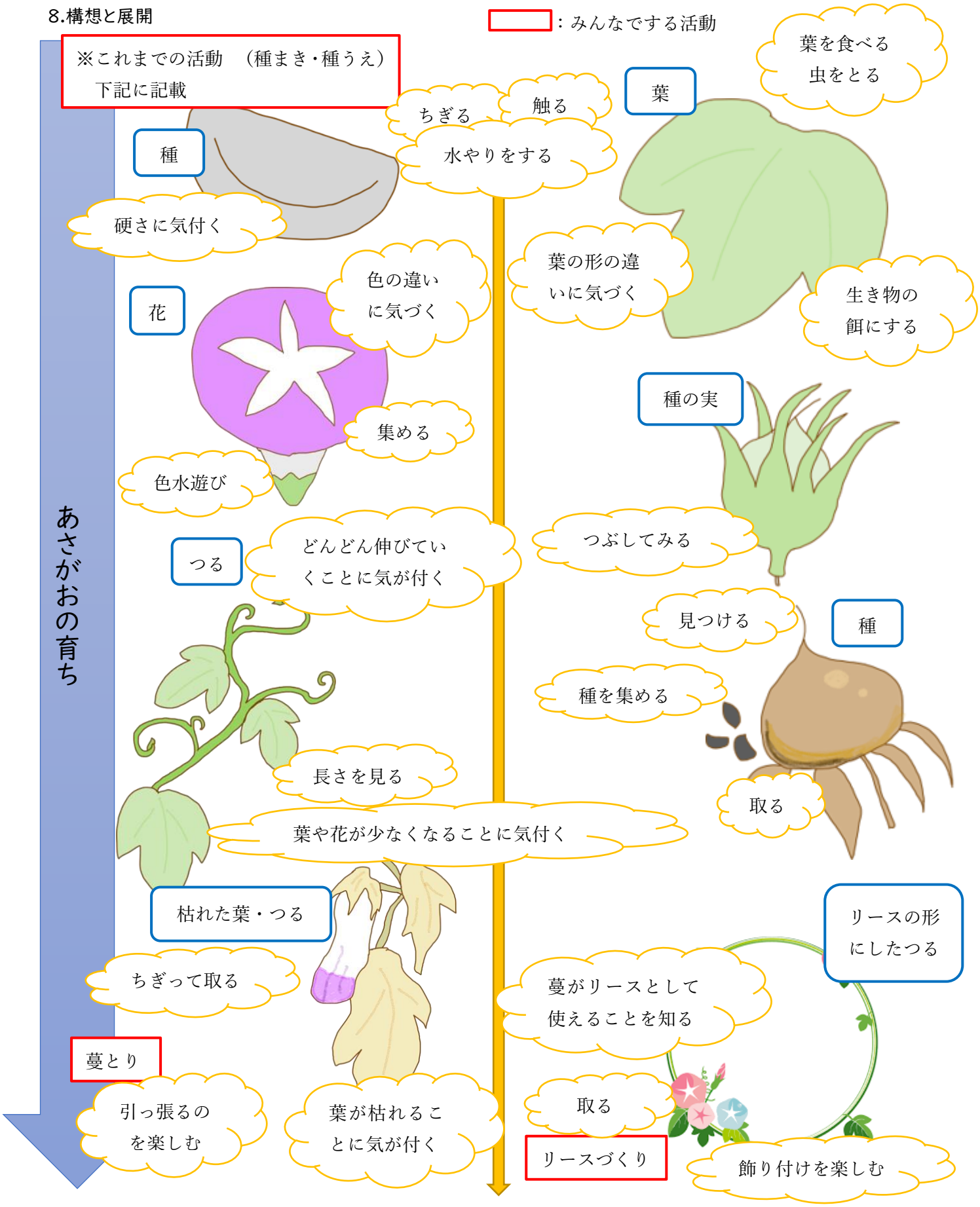
〇ESD で育てたい価値観

自然環境、生態系の保全を重要視できる。

幸福感に敏感になる。幸福感を重視する。

〇貢献できる SDGs
7：エネルギーをみんなにそしてクリーンに
15：陸の豊かさも守ろう
16：平和と公正をすべての人に

8.構想と展開


：みんなでする活動
※これまでの活動　（種まき・種うえ）
下記に記載
あさがおの育ち
種
硬さに気付く
ちぎる
触る
水やりをする
葉
葉を食べる
虫をとる
葉の形の違
いに気づく
生き物の
餌にする
花
色の違い
に気づく
集める
色水遊び
種の実
つぶしてみる
つる
どんどん伸びてい
くことに気が付く
見つける
種
種を集める
取る
長さを見る
葉や花が少なくなることに気付く
枯れた葉・つる
ちぎって取る
リースの形
にしたつる
蔓がリースとして
使えることを知る
蔓とり
引っ張るの
を楽しむ
葉が枯れるこ
とに気が付く
取る
リースづくり
飾り付けを楽しむ

〇保育者の援助

▲子どもの言葉を聞いたり、行動を見守ったりする中で必要なものを提案、用意しながらそれぞれの子どものしたいことや思いが実現できるようにする。

▲保育者や友達がしていることを言葉で知らせ、何をしているのかがわかったり、興味を持ったりしやすくする。

▲子どもたちが意欲的に関わっているところを受け止めたり、したいことに必要なものを提案・用意したり、聞き取ったりしながら、興味関心の芽生えを大事にすることで、自分なりにアサガオに関わりたい気持ちを持てるようにする。

◎ ※これまでの活動　（種まき・種うえ）　について

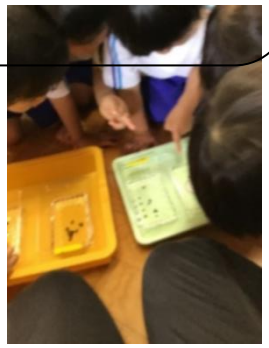
あさがおの絵本を読んであさがおを植えることを知る

３歳児の栽培活動として生長の様子がわかりやすいあさがおを選んだ。絵本を読んだ後、あさがおについて知っているかや、育てたことがあるかなどを聞き、ぶどうぐみでも育てるのはどうかと提案すると子どもたちから「育ててみる。」と返答があったため、そのまま用意していた種が入ったパッケージを見せる。子どもたちは、パッケージに写っている花を見て「青色がいい！」「ピンクの花が好き」とあさがおの花の色に興味を持っている様子だった。

種を水につける

「あさがおを育てるのに何が必要かな？」の問いに、「水とお日様」「土」「種を水につけないといけないんじゃない？」と意見が出た。絵本にも、水につけることについて書いてあったことを覚えていた子どもの言葉を取り上げて、一晩、種を水につけておくことにした。

種の形が種類によって違うことをみんなで確認し、つけておいて置いた。次の日に、確認すると種から白っぽい芽のようなものが出てきていることに子どもたちが気づき興味を持って触ったり、見たりしていた。



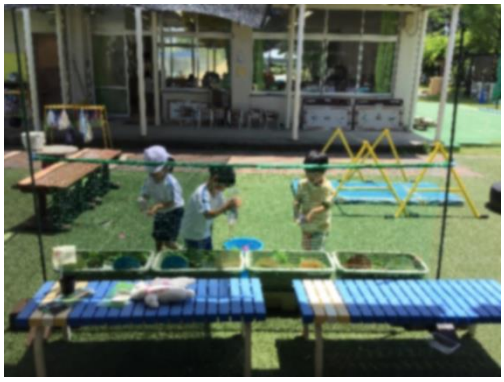
土の準備　種を植える

土の準備は、興味を持った子としようと保育室の前に土とプランターとスコップを用意して好きな遊びの時間に作業した。保育者のそばで安心して過ごせる子や土を入れることに興味を持った子が、一緒にプランターの土を入れていた。

みんなで、それぞれの花の違いが分かるようにプランターごとに種類をわけて、子どもたち一人一人が自分の指で穴をあけ種を植えることができていた。

水やりと生長の様子

種を水につけていたからかすぐに芽が出て、子どもたちが喜んで保育者に報告に来るようになった。「はやく大きくなってほしい」「蔓が伸びてきた」「昨日より葉っぱが増えた」と言ったり、無言で眺めていたり、水やりを自らしたりする子もいた。子どもたちの高さまでのネットにしたため、蔓が上へ飛び出ているところが見え、行き場のなくなった蔓を保育者が下のほうのネットに編み込ませているのを見て真似する子もいた。
夏休みに入ったため保育者が世話をしたり、様子を見ている。



9.成果と課題
〇成果事例

◎エピソード ≪アサガオとカナブンの幼虫≫

（場面①）
給食後、アサガオのプランターを眺めているＹの姿があった。しばらくすると、
Y「先生！虫がいる！！」と大きな声で知らせてきた。
見に行くと AK とＹが持っている青いタライの中に小さな幼虫がいた。コガネムシの幼虫だった。
Y「コガネムシの幼虫がアサガオのところにいた。」
保「そうやったんや。どうしようと思ってんの？」と尋ねると、Y「アサガオのところ戻しとく？」という。
それをきいたＲは、すかさず、R「ダメだって！戻したらアサガオ食べられちゃうやん。」
Ｒの言葉を聞いてなのかＹは、カナブンの幼虫をアサガオのプランターに戻さないことにしたようだった。

Y に関しては、
つながりを尊重する態度：以前からぶどうぐみのものとしてアサガオに興味を持っていた Y は、アサガオを気にかけたりする姿
コミュニケーションを行う力：幼虫をアサガオのプランターに戻すと言ったが、R の発言を取り入れやめることにした姿

R に関しては、
コミュニケーションを行う力：友達の考えを聞きながら、それに対しての自分の考えを伝える姿。
批判的に考える力：アサガオの根っこが食べられることでアサガオが生長できないことを理解している様子。
つながりを尊重する態度：アサガオに関心を持ちアサガオの根っこが食べられないようにしようとする態度。

AK はこの場面では、一言も発していない。
他者と協力する態度：アサガオのプランターにいたコガネムシの幼虫をみつけた友達（Y）のしていることに興味を持って、関わっている姿

（場面②）
「どこか違うところに連れてってあげる？」というと「森」と言って子どもの森へ行くことを決めた Y。
AK と Y と R が持ち運んでいると途中で、YO が「運んであげる。」と一緒に持った。
階段では、Y「危ないからゆっくり行こう」と言うなど、声をかけながら一緒に歩いていた。

この場面②での、ESDの視点で保育を振り返り、読み取れたことは、
Y に関しては、
未来像を予測して計画を立てる力：コガネムシの幼虫をアサガオの根っこが食べられないように、別のところへ連れて行こうと決めた様子
進んで参加する態度：自分たちでコガネムシの幼虫を子どもの森へ連れて行こうと決める姿。
コミュニケーションを行う力：階段で、Y「危ないからゆっくり行こう」と言って、声をかけながら一緒に歩く姿

R に関しては、
つながりを尊重する態度：友達がしていることをわかって手伝おうとする態度。
進んで参加する態度：自分も発言したコガネムシの幼虫の行方に興味を持ち関わっている姿から

この4人に共通して
他者と協力する態度：友達がしようとしている子をわかって幼虫の入ったタライを友達と一緒に運ぶ。

（場面③）

A や R や YO や K がタライを持つのを手伝ったりしながら、Y と AK は子どもの森の端まで行く。

「どこに連れてってあげることにしたの？」と尋ねると YO「ここがいい」と誰も頻繁にはこないような森のすみっこに YO と AK と Y でタライをひっくり返し幼虫を放した。その様子を K も R も A もあとからどこにいるか様子を見に行っていた。みんなで、「元気に育ってね～。」といってコガネムシの幼虫と別れた。

この場面③での、ESDの視点で保育を振り返り、読み取れたことは、 この3人に共通して、 進んで参加する態度：自分たちで決めたことを最後までやり遂げた姿から。 未来像を予測して計画を立てる力：森の端っこなら踏まれることもなく生きていけると考えた姿。 多面的、総合的に考える力：カナブンをアサガオの害虫として扱うのではなく、生き物として考える様子。

〇課題

この実践を通して、今後、保育をしていくうえで大切にしなければならないと思うことは、

・保育者自身がESDの視点をもつこと。

・自分の価値観とは違う価値観があることを知る。そして、自分の価値観も大切にしながら、他の保育者や子どもの価値観も尊重すること

・保育の振り返りから子どもたちの園生活での“人・もの・こと”すべての環境との関わりを丁寧にとらえようとする姿勢を持ち、「どんな人になってほしいか」と、子ども達の将来・未来を見据えて、ESD で育みたい視点や資質・能力に繋がるように意識しながら保育をすすめること

だと感じた。

アサガオだけでなく、園の生活の中にも ESD の視点や資質・能力があるのではないだろうか。もっと様々な場面の子どもたちの姿や毎日の保育を振り返る中で、どのように子どもたちの行動が変容しているかを今後も読み取っていきたい。

園の目指す子ども像

目的に向かって自分なりの考え方や方法を生み出す子ども	ありのままを分かり合い、活かし合い、分かち合う子ども	身の回りの環境に親しんで愛着をもち、自ら積極的にかかわり、大切にしようとする子ども

ぶどうぐみの目指す子ども像

創造する **自分なりに思いをもって、意欲的に試したり、繰り返したりしようとする子ども**	**人とともに** **友達と過ごす中で、自分の思いを伝えたり、聞いたりしながら、一緒に活動したり、遊んだりすることを楽しむ子ども**	**地球の中で** **身近な出来事に、自分なりに関わろうとする子ども**

アサガオを育てよう（6月～12月ごろ）

ESDで重視する能力・態度が揺さぶられる子どもの姿

○多面的・総合的に考える力
- アサガオを使った遊びを考える。
- アサガオの思いは友達によってさまざまであることを知る。

○コミュニケーションを行う力
- アサガオについて知っていることをそれぞれの経験をもとに話したり、友達の話を聞き、思いや考えに触れたりする。

○他者と協力する態度
- クラスの友達のアサガオへの思いを知り、同じ思いの友達とお世話をしようとする。

○進んで参加する態度
- アサガオ以外の植物や生き物に関心を持つ。
- アサガオに対して意欲的に自分なりの思いを持って関わろうとする

ねらい（6月）
○自分なりに遊びの面白さをみつけて、じっくり遊ぶ
○保育者や友達と一緒に遊ぶことを楽しむ
○自分なりに身の回りのことをやってみようとする

友達と一緒に過ごす心地よさを感じている中で、もっと友達と関わりたいという気持ちや自分の思いを友達に伝えて遊ぶ楽しさを感じているようだ。

色々な場所で、その瞬間に出会う環境（モノ・コト・ヒト）と関わることで自分なりにしたい遊びをみつけて遊ぶ様子も伺える。

クラスの友達に積極的に関わろうとする

自分なりに思いを持って遊ぶ

園生活の流れの簡単な見通しをもつ

ぶどうぐみとして友達と一緒に過ごす園生活の楽しさを感じ始めている。

個人差はあるものの園生活の流れに慣れ、安定してきているようだ。

進級（4月）

新しい生活の仕方を知り、慣れる

担任に信頼を寄せる

安心できる人や場所、ものを見つける

少しずつ保育者との信頼関係が築けてきている。